

【七月の言葉（令和六年）】

人は、何をするかわからない

” 危うさ ” を持っている。

さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし

（歎異抄）

私たちは自分の行いを自分自身で決定していると思いがちです。たとえば今現在、悪事に手を染めていないのは、自分が善人だからだと思ったりしていませんか。

しかし、「しかるべき縁があれば、人はどのような振る舞いもしてしまう」という親鸞の言葉の通り、私たちの誰もが縁によって悪に手を染めることもあります。これまで大きな罪を犯していないのも、ただ縁がなかったただけだからなのです。

この世にいる限り、これからも私たちは縁の中で生きていきます。「明日は何をしでかすかわからない」という自分の危うさを知ること、同じように生きる他人に対しても心を寄せることができるのでしよう。